

# 糸満大綱引による観光化

## *Tourism of the ITOMAN Big Tug of War Festival*

1K10C092-8 大原 翔

主査 寒川 恒夫 先生

副査 葛西順一 先生

2020年東京オリンピック招致が決定し、スポーツによる観光というものが、ますます注目されてきているように思う。メディアでは、観光によるビジネス効果ばかり報じているが、単に観光化を推し進めることで私たちはメリットばかり享受することができるのであろうか。もちろん、スポーツによって外国から人々が集まり、お金を落とし、経済が活性化することは素晴らしいことであるが、それと同時に様々な課題や問題が生まれることを知らなくてはならない。本論では、観光化によって生まれるメリットと、それによって生まれるデメリットについて論じていきたいと思う。

第一章では、観光の定義をする。世界観光機構 (UNWTO) によると、観光とは「1年を超えない期間で余暇やビジネス等を目的として、居住地以外の場所を訪れ滞在すること」と定義されている。しかしこの定義では、短期のビジネス旅行も観光の範囲内に入れられているし、ワーキングホリデーのように仕事なのか、観光なのかあいまいな領域も存在する。観光という言葉の意味は現在広くなりすぎていると私は考える。観光学者の間でもいまだに観光は決まりきった定義がないため、観光を扱う前に一度整理しておくことが重要であると思った。

また、現代の観光は非常に多様化している。その多様化している観光形態を整理し、今回私が扱う糸満市の大綱引きの形態を明確にし、他との差別化をはかった。私が調査した沖縄県は今では観光大国になっている。その沖縄県はなにも最初から観光大国として成り立っていたわけではなく、様々な創意工夫がなされてできたものである。そこで観光化のよい例として、沖縄県がいかに発展してきたのかを述べる。

第二章では、はじめに私が調査した沖縄県糸満市の概要を伝える。糸満市には、数多くの伝統行事が色濃く残っている。中でも糸満ハーレーと糸満大綱引は、人々の注目度は非常に高い。糸満ハーレーは、旧暦5月4日に行われる。漁人が数多く暮らす糸満なので、航海安全や大漁祈願として行われている。糸満大綱引きは豊年と大漁祈願、家内安全、無病息災を祈る神事で、南北に分かれた雌雄の綱の結合によって実りを予祝し、勝負の結果で吉凶を占う行事である。今回は糸満ハーレーは調査していないためあまり触れずに、私が調査した糸満大綱引について書いている。糸満観光協会が主催している、糸

満大綱引バスツアーに参加し、そこで何を彼らが見せようとしているのか、そこで私がなにを感じたのかを述べたい。このバスツアーは今年初の試みで、まだまだ試行錯誤している段階ではあるが、観光化に必要な要素が大綱引ないし糸満市全体にあることを再確認することができた。

最後に、観光化による課題を述べ、どのように糸満市が観光化に努めていくべきかを示す。民族文化を観光化する際に問題となるのが、その真正性である。観光化をする際に、ありのままの自分たちをパフォーマンスとして観光客にみせることは不可能である。私たちがいきなりプロのミュージシャンにステージに上げられ、パフォーマンスをしと言われてたらどうだろうか。心構えができていないのにありのままの自分を見せなければならぬ気恥かしさや、大きさに言えば敗北感を感じるだろう。自分たちの生活文化をどのように見せるか練り上げ、演じることのできるパフォーマンスになれば、この種の気恥かしさや敗北感は味わうことがないだろう。まさに糸満市の大綱引きはこの準備段階である。真栄里の大綱引きが真の姿だと仮定すると、その大綱引きから離れた、観光用の、見せるための出し物がほんの少しだけ見せられているのだ。むしろ本来の内容を熟知している者ほど、観光での中途半端な見せ物に違和感を覚えるのである。

しかし生きる文化と観光客が求める文化すなわち、生活文化と商品化された生活文化が必ずしも別物とは限らない。観光は、自文化内での評価とは全く別の基準である。そのため観光化に一步踏み出した糸満大綱引は、これからその両者が合わさるところをうまく見つけ出し、観光化に努めるべきである。